

訓示をした。「ゲリラの攻撃を警戒せよ……など」であったが、私はこの時銃を左肩にかけていて「ハイ」の返事で力が入り、銃の引金に指がかかっている弾が飛び出した。耳鳴りがしばらく続いたのだが、中隊長は何も言わなかった。当時の兵力は三〇名ぐらいで、若し敵に発見されたらと思うと大失敗であった。

病死された先輩のことだが、七月頃マラリアで衰弱していた萩原久雄伍長の顔に水をつけながら鬚を剃ってあげた。しかし、これが最後となって翌朝死亡された。兄とも慕う人だった。

竹政岩雄曹長は七月中旬、ネグロスでマラリアのため病死されたが、最後まで世話をし死水をとってあげた。同じ第一小隊で、大沢小隊長、萩原伍長と私は同一行動をとっていたので、今でも哀しい思い出である。

内地の司令部偵察機隊毎日が命がけ

富山県 長谷川 光 勇

「長谷川さんは我々仲間では若い部類に入るのでしょうが、何年生まれで、勤務は何処でしたか。」

大正十三年八月十二日生まれですから徴兵なら初年兵というところだが、私は滑空機（グライダー）の通信省の免許を持っていた。昭和十七年頃はグライダーの草分けで、グライダー熱が盛んになった。兵隊へは志願でいったのですが、その前に旧制中学校でグライダーの教官みたいなこともやっていた。若かったがグライダー免許を持っている者は少なかったですから。

グライダー免許というのは、今も言ったように通信省（今は郵政省）の管轄で、民間人の航空養成所が、各地方、ブロック別に六カ所ぐらいあったと思う。私は富山県だから新潟の養成所へ行行った。そういう人た

ちが、その後軍人になって予備下士官となり、後で話す飛行学校で、主に輸送機や海軍の大艇（飛行艇）など、陸海両方の助教になったりして、飛行学校の生徒を教育した。だから、その人たちは、余り軍人精神旺盛ではなく、自分で民間精神旺盛だと言っていた。

予備役なので階級は余り上がらない、軍人が上官になっていくので、技術は立派なのに気の毒に思っていた。私は現役で徴集される前に、グライダー免許を持っていたし、若かったから志願をして、太刀洗の陸軍飛行学校で教育を受けたのです。

―飛行士の教育は、一つ間違えば殉戦死というのだから、随分厳しい教育だったでしょう。

滑空教育の目的は、大型木製グライダーに兵員を乗せて、夜陰に乗り、音も無く敵陣地へ進入するという、特攻滑空空艇隊の教育なのです。本校は私の入校した太刀洗、分校は福岡の甘木、宮崎の木脇村、熊本、朝鮮の大丘、大田などだったと思います。そこで、それぞれ訓練を受けたわけです。

グライダーの上級はソワラー、中級がセコンダー、

初級がプライマリーという免許なのです。太刀洗ではソワラーの訓練をやっていた。私も免許は持っていたが上級ではないので、赤トンボといわれる練習機（ドイツ製ユークマン）に曳航してもらおう。空中で離されるのだが、高度が三―四〇〇メートルぐらいだ。飛行場だから九七式双発の重爆機などが前方から来ると、グライダーは暴れる。縦揺れ（ピッチング）横揺れ（ローリング）したりするので随分悩まされました。

初めは、滑空と飛行操縦と両方やった。今言った滑空でも曳航後も事故を起したり、墜落する者もいて犠牲者も出たし、飛行機の上から飛び降り自殺をした者もいる。厳しい訓練に耐えられなかったのでしょうか。木製滑空機は敵のレーダーに反射しないから、奇襲用、最後は特攻用として使用されたため、訓練は特殊訓練でした。

―教育を終了後、皆それぞれ専門に別れるのです。うが長谷川さんは何処へ入ったのですか。

学校では滑空、操縦とあったが、私は司令部偵察機の操縦の部隊に入った。教官は少年航空兵出身の准尉

クラスの人、当時我々はまだ少年だから、何かお爺み
たいに見えたが、操縦の神様みたいで、飛行機操縦は
まるで、下駄を履くようなもの、一寸搭乗して急上昇
して行って、誰もみでも何でも自由自在だった。

偵察の部隊は千葉県の八街（落花生で有名）の松林
の中にあった。入ったのは昭和十九年の夏だったと思
う。偵察専門で、その時はサイパンやテナンも玉碎
して、その飛行場からB 29が飛んで来るようになって
いた。

サイパンのB 29の基地を偵察するには、硫黄島を奪
還しなければならぬ。その作戦をするためには硫黄
島を偵察しなければならない。しかし、それが出来る
日本一速い新司令部偵察機（新司偵）が八街には五、
六機しか無かった。

その頃、我々の基地では連日連夜のように、グラマ
ンやP 38の空襲があった。一〇メートルぐらいの超低
空で来て、格納庫の中をのぞくようにしていた。米軍
が初めてロケット弾を使用した。今までの爆風が上
の方に行くが、ロケット弾は水平に、横なぎに爆風が

来る。そのため、これに当たると内臓破裂をする。人
間を殺すのもって来いのものだとして初めて聞いた。

「新司偵」のことを少し説明して下さい。

新司偵とは新しい司令部偵察機のことです、双発で見
るからに速そうな姿です。現在の新幹線の運転車両の
頭部を見ると、「新司偵」を思い出します。一型、二
型は頭部が若干段になっているが、三型は段が無くス
マートだった。偵察機の操縦はベテランの下士官が
やるが、偵察は将校がやる。天体望遠鏡のような眼鏡
で下を見る。特殊写真技術なので将校でなければなら
なかった。

フィルムは現像して直ぐ作戦部隊に送る。日時、場
所を明記してだ。偵察機操縦者も超ベテランの准尉、
曹長だった。出勤するのは一機だけで極秘で行く。新
司偵は日本で一番高速の優秀機だった。

何故八街に「新司偵基地」を作ったかという、当
時日本内地で、硫黄島に一番近かったからだとい
う。ところが、硫黄島上空にはグラマン戦闘機が五、六機
何時も警戒している。集中攻撃をされたら偵察機は無

防備に近いのだからたちまち餌食になる。だから、出勤して戻らなかった「新司偵」を私だけでも三機知っている。

「新司偵」に乗っている人たちは、我が航空隊にとつては虎の子で、その精銳が八街に集まっていた。だから、極秘だったし、出勤も秘中の秘だった。出撃しても帰るまでは皆心配している。

硫黄島で警戒しているグラマンは、常に滞空している。だから、「新司偵」を追っても八街までは燃料が切れるから、半分の距離になったら帰って行く。だから偵察機から半分過ぎたら「我帰還せり」と無線を打って来る。偵察は成功したことだ。幹部は全部迎えに出た。その出迎えは公然と並ぶ、すごいものだった。「九死に一生の帰還」だ、まったくの決死隊だ。この命令は何処から出るのか我々には判らないが、かなり高い作戦司令部からの命令だったと思う。私はその現場にいた。

―偵察は敵の待っている所へ行くのですから、どんな具合にやるのですか。

偵察撮影は千メートル以下でやる。写し終わったら一気に上昇し、超高度の所から硫黄島―八街へ超高速で逃げ帰る。当時、時速八〇〇キロをオーバーしていた。飛行機は空中分解寸前だった。飛行中は情報管理が厳しいから無線は使えぬ。カンの良い熟練した将校、准尉でなくてはならない。八街は日本内地最高の第一線基地で、こういう最優秀者のみが集められていた。

着陸すると操縦士はほとんど失神していた。機から降りて来られぬ。精神的にも肉体的にも全精力を傾倒しているからで、皆で担いで降ろす。全身疲労の極限を越えている。我等はそれには感激した。偵察隊とは何と恐ろしい部隊だと思つた。戦闘機も大変だが、それに負けぬ、無防備、乗員二人共拳銃だけ。操縦士の背当てに鋼鉄板がある。後方から敵弾を受けたら防ぐのだ。しかし、飛行機を軽くするため、それをはずして、置いて出撃して行く。まったくの無防備、護身の軍刀と拳銃のみ、完全決死隊だった。

この偵察は大変重要なことで、硫黄島奪還ということとは、日本本土の運命を決することですから、大本營

直接か、それに近い所から命令が出ていたのではないかと、今も思うのです。

昭和二十年六月ころになると（沖縄玉砕）、硫黄島へ行ける飛行機は無くなってしまったようだ。航空機を造る工場がやられてしまったのだから。

「新司偵」は内地に幾十機ぐらい残ったのかは判らない。外地の「新司偵」は皆落されてしまったのだと思う。

硫黄島へ行ける偵察機（三型）も無く情報不明であり、硫黄島奪還も不可能になってしまった。

そのため偵察機の任務は「夕弾攻撃」となった。偵察機はスピードが早いから、B 29の上空にいつて夕弾を射つ、夕弾は三秒後に爆発して、B 29の編隊機の翼がもげて墜落する。これが「夕弾攻撃」という。だから偵察機はこれが任務となった。

「新司偵」の任務も、別の任務になってしまったのですが、航空隊員のもその後任務はどうなったのですか。

乗る飛行機が無くなってきたので、敵上陸軍の戦車

に対する特攻訓練に変わっていった。

しかし、八月十五日終戦となった。八月には、日本空軍は総攻撃をやる予定で、もう一週間終戦決意が遅かったら沢山の者が、最後の特攻で死んでいったと思う。陛下の決断が我々を救った。

滑空機や中型練習機に五〇キロ爆弾を積んで特攻に出たが、敵陣や、艦船まで行けず皆やられてしまった。途中で、ゲラマンやP 38の餌食になったわけです。

「貴方の仲間、飛行隊の人々は、その間どうされたのですか。」

飛行隊は軍人精神旺盛、仲間が皆死んでいる。飛行学校の仲間も一、〇〇〇人ぐらいたと思うが、半数はフィリピンへ行く途中、台湾に着く前に何隻かの潜水艦にやられ、その後も輸送船が雷撃のため一瞬にして轟沈させられ、皆戦死してしまった。

次の船団は中国本土へ行き、そこから沿岸伝いにフィリピンに上陸した。しかし、その後の地上戦、飢餓と病気で、多くが死んでいる。

私は特攻の第一次に志願したが、長男ということで

次に回された。当時の我が国は長男は家の跡を継がせるといふ思想と風習があったからだと思います。

第二次は八月十七日か十八日の予定だったようです。一週間終戦が遅れたら皆死に行く作戦だから、我々の仲間では生きて還る人はいなかったと思う。私の場合、終始内地だけだった。長男だったので班長は外地へやらなかったのかも知れない。私の家は女七人男一人だったから。一人息子は余り特攻へは出さなかった。長男尊重の思想があったから私はそれで命長らえたのかも知れない。特攻に行かなくても、八街でも随分やられた。ほとんどがグラマンで、集中攻撃だから、その当時、私は何と運の悪い部隊へ来たのかと、ぐちったものだ。八街をつぶせば内地部隊は盲目になる。偵察をしなければ航空作戦を立てることが出来ない。アメリカの偵察部隊攻撃は、昼夜を分かたず、機関砲をバリバリ、すごく射って来る。空を見れば何時の間にかグラマンがいる。

内地の特攻基地も物凄く狙われた。私たちの八街偵察機基地は、至宝ともいえる名人の集合部隊だった。

今でも頭の下がる思いでした。出発等も極秘ですから何時出撃していったか判らない。帰って来ない時は部隊は葬式のように皆悲愴な思いでした。

昭和二十年になると、こちらは出撃出来ず、我々も飛行場へ蛸壺を掘って退避した。ロケット爆弾で攻撃されても、爆風が頭の上を素通りして被害を少なくすることが出来た。このように八街の飛行場は、操縦士や偵察将校の機上勤務者は勿論だが、地上整備の軍人も軍属も命がけの毎日でした。

〔一〇〇式司令部偵察機三型の諸元〕

全巾 一四・七メートル、全長 一一メートル、全高 三・三メートル、自重 五、七四〇キロ、発動機馬力 一、二五〇×二基、航続距離 一、三〇〇キロ 一一時間、乗員 二名。

*注目すべきは発動機の馬力数である。

八人乗りの一〇〇式重爆撃機二型の武装は七・七ミリ 機銃五、二〇ミリ砲一、爆弾一、〇〇〇キロの重装であるが、その発動機馬力は一、二六〇×二基である。

二人乗りの一〇〇式新司偵の馬力と殆ど同じであることは如何に新司偵が高速・高性能であったかを知ることができる。

最後の声は、お母さん

宮城県 木村 正司

―木村さんは、先の大戦に四年十ヵ月参戦された由、青春の貴重な時代を、外地にて種々御苦労があったことと思います。人間は本来、悲しみや、惨めなこと等は、つとめて忘れ、楽しかったことのみ、いつまでも心にあるものです。今改めて五〇年前の体験談や苦労話を聴かせて下さい、と申ししましても御無理とは思いますが、御記憶をたどってお話しして下さい、お願いします。

私は昭和十六年三月教育召集で、東部一〇五部隊、飛行第五戦隊へ入隊しました。その時、三ヵ月召集ですから、直ぐ帰って来ると思っただけで気楽に行きまし

た。

―航空隊教育ですね、教育内容は。

そうですね、内容は至極、楽な兵科でした。年齢も二十四歳ですから、と思っただけですが、同期入隊者は、皆三十歳以上という、社会においては立派に活躍している人ばかりでした。妻あり子ありの人達です、私も、もう少しで嫁を貰うところでした。

―勿論、東北の人達で編成されている部隊でしょう。それが尋ねて見ましたら、全国的に集まっているのです。北海道から九州まで、一寸言葉に不自由を感じました。

―部隊の所在地は何処でしたか。

千葉県野田市にありました。ここに十日程いまして、一応軍隊生活というもの第一歩を教えられました。十日後に出勤でした。下関まで行きましたが、その時は極秘裡に出発しまして、列車も窓覆いをして進行しましたから、何時何処を通過したのか不明でした。停車して下車といわれたら下関でした。